

日本キリスト教会大阪北教会

2017年4月23日 礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書20章24節～29節

24十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」26さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

説教『見ないのに信じる人はさいわいである』

◆まず初めに皆さんにグッド・ニュースをお伝えします。実は子供10人、大人6人の16人になったからです。子供は幼稚園児が2名、高校生が1名、中学生が3名、小学生が4人で16名です。私達日本キリスト教会は、全国に稚内から沖縄まで140の教会がありますが、日曜学校に子供が10人集る教会は、1割あるかないかです。そんなことでありまして、昨日も孝子さんのお誕生日でしたので、私たちが最初に奉仕した東京の教会の姉妹からお祝いのお電話をいただいたのですが、「ところでこの頃日曜学校どうですか」とお聞きしましたら「ゼロです」とのお答えでした。そんなことで大きな教会でも子供が集まらないのです。それで、「みんな自分の聖書持っていますか」と聞きますと、8人が手を挙げました。あとの二人の内の一人は、今日初めて来た中学1年生でしたから仕方ありません。二人に聖書をプレゼントしました。「聖書」という本があることも今日初めて知ったのです。やがておおきくなって、「友達に誘われて教会に行ったあの日が自分の人生の転機になりました」というような日が来ることを願わないではおられません。

◆ところで、只今、司会者の吉元長老が、この聖書のことを、「神様が私達に与えてくださった」というふうに祈りの中で言われました。わたしたちは聖書を与られているという、これに勝る神様の贈り物はありません。私が初めて教会に行ったのは中3のクリスマスですから、15歳の時でした。それから、60年以上経っていますが、聖書という書物は、本当に他に比べる物がないユニークな書物ですね。わたしたちは、ずーっとこのヨハネによる福音書を読んできました。ヨハネによる福音書の講解説教は、私にとっても

これが初めての経験です。ようやくヨハネ福音書に出会ったという思いです。聖書に書いてあることは、いらぬ、余計なことは何も書いてないのです。どうしても、ということだけ書いてあるのです。それでこの間も受難週の主日に「成し遂げられた」というイエス様の十字架上の御言葉を聞きました。その意味は、主イエス様が父なる神様から託された御業を成し遂げてくださり、今も為し続けていてくださるということを、今更のように学びました。それ故に、その御業をいちいち書き連ねれば、この世界も納めきれないであろうという、福音書末尾の記事を意義深く拝読いたしました。

◆この福音書の作成時期は100年頃とされています。それ迄も、その後も、イエス様は身に十字架の釘あと、槍で突かれた脇腹、その傷ついた体をもって、甦がえられた方として、現にわたしたちのただ中にいてくださいます。聖書に書かれてあることは、当面これは他人のことです。わたしのことではありません。けれども、ずっと読んでまいりますと、身につまされる。自分とよく似た人が、こういうことで悩んでいるのだ。こういうことで行き詰まっているのだと、この聖書を読むと必ず出会います。その状況の人に、神様は、イエス様は、どのように接しられたのか。それをわたしたちが読んでいく時、聖書に書かれてあることを、聖書中の人物に主が為さったことを、わたしたち1人1人にもしてくださることが分ります。必ずしてくださるので。一番ふさわしい時にこのわたしにも救いの御手を差し伸べて下さるので。神様は、イエス様はどのように人々に接しられたのか。その事を私たち1人1人にもしてくださる。必ずしてくださる。一番ふさわしい時に救いの御手を差し伸べてくださる。聖書とはそういう約束の書なのです。

◆今日ご一緒に読みますのは、イエス様の12人弟子の1人、トマスという人のことです。今日の箇所は24節から29節まで、たった6節ですが、これは聖書って何なのかということをおわたしたちに教えてくれる箇所なのだと思います。聖書というのはまず第一に神様の御言葉、神様の御業。イエス様の御言葉、イエス様の御業を記しています。次には、その御言葉を聞いた人、その御業に触れた人、その御業に触れられた人が、神様に対してどういう反応をしめたのか、どういう感謝を捧げたのか、そういう神様への証しが書かれています。その次には、そういう経験をした人が、こんどは自分の同胞とか友人とか、これから生まれてくるであろう人たちへの贈る言葉、という形で、神様の恵みを伝えています。そういう言葉もあります。そういうものが一つとなって聖書という書物があります。「聖書はどこからよんだらよいですか」とよく聞かれます。今なら、「ヨハネによる福音書を最初から読まれるのがいいですよ」とお勧めしたい。わからなくても、なんでもいいからヨハネ福音書を読みなさいと勧めたいですね。どんな読み方でもいいからヨハネ福音書を読んだら、あなたに対する神様の御言葉、イエス様の

御言葉に必ず出会います。イエス様の御言葉、また信仰に導かれた人々の言動などに、必ず出会います。そういうふうに今ならお勧めしたいと思います。

◆聖書って何か。何が書いてあるかという事が、きょうの箇所に出ています。イエス様のお言葉があります。トマスはもう悩みに悩みぬいているわけです。どうしたらよいか将来の展望が全く開けないでいます。この方こそ真の師と信じて疑わなかった先生が死刑になって殺されてしまったわけです。忽然と自分たちの眼前から失われてしまった。今日の箇所はそれから十日位後の話です。他の仲間たちも恐れて身を隠してしまっていますから、彼は1人離れて悩みに悩んで、それでイエスさまが十字架の後三日目ですから日曜日の夕方、隠れている弟子たちに現れた時に、トマスはそこにいなかったのですね。ですからイエス様の「あなたがたに平和があるように」という「シャーローム」というイエス様のお国の挨拶の言葉を彼は聞けなかったのです。今日のすぐ前にそれが書いてあるわけです。「シャーローム」と言われて、「手と脇腹とをお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ」と、20節にかいてあります。自分たちも見つかったら死刑だと、恐れてちじこまり、部屋に鍵をかけて弟子達はいたのですが、そこにイエス様が現れて、イエス様は手と脇腹をお見せになります。すると、「弟子たちは喜んだ」と書いてあります。

◆これが契機になって、キリスト教会は日曜日に礼拝することになります。それまではユダヤ教の安息日は土曜日でした。その日に礼拝を守っていた。それがこういうことがあって何があっても守る土曜安息が、日曜日に変わります。こ復活の主イエス様が現れなされた日は、特に過ぎ越しの祭の中の安息日ですから、非常に大事な安息日でした。その国民的な祝日が一日ずれることは革命的なことでした。そんなことが起こるのですね。それをイエス様がもたらしてくださった。「シャーローム」と言って下さった時、トマスはそこにいなかった。他の弟子たちが、イエス様を見たといった時、トマスは言います。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手をその脇腹に差し入れてみなければ、私は決して信じない」と。このトマスの言葉をもイエス様は聞いておられるのです。マタイによる福音書の最後には「わたしは世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」というイエス様の御言葉が記されています。わたしたちは聖書を読む時、それをたとえ話のように聞くわけですがけれども、死んで甦られたイエス様は、先の日曜日も、そのあとの週日の、ほかの弟子たちとトマスたちとのやりとりも全て、御覧になり、聞いておられるわけです。これが事実なのです。わたしたちもそれ以来、キリスト教の伝統に従って、日曜日毎に礼拝を捧げます。もちろん週日も主は共にいてくださいます。一週間もあれば、人生どんな事でも起こるのですね。けれどもそれもこれもすべてイエス様が見ておられる。聞いておられる。共にいてくださる。だから礼拝なのですね。イエス様は「信

じない者ではなく、信じる者になりなさい」とトマスに言われます。するとトマスは答えて「わたしの主、わたしの神よ」と思わず叫びます。ついさっきまでのトマスは、他の弟子たちが恐怖のあまり、幻を見たぐらいに思っていたでしょうが、トマスはもう他の弟子たちを飛び越えて、イエス様のお言葉を聞いたら、「わたしの主、わたしの神よ」と叫んでいるわけです。生きて我々のために十字架の制裁も受けてくださるその御体をもって我々を顧みてくださるイエス様に対して思わず、「神様！」と叫んでいるのですね。

◆「イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである』と。何事にも時がありますね。けれども聖書の中の福音書だけで良いと思いますが、そこでイエス様が為さり、語られた御お言葉があります。14章18節に「わたしはあなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」との御言葉があります。そして今、おっしゃった通りに帰って来られたのです。「見ないで信じる」というのは、その語られた相手を心底信頼することですね。「見なければ信じられない」というのは、信用していないという事ですね。本当に信じているなら、その人が言われた事は必ず成ると信じて待つのでないでしょうか。信頼するとはそういうことだと思います。信仰というのはそういうイエス様に対する神様に対する信頼のことです。

◆そして聖書を見れば、人はどん底に落ちるのです。けれどもイエス様が、墓に葬られて数日経ったラザロに、「ラザロ出て来なさい」と呼ばれると、ラザロは出て来たと聖書に書いてあるのですね。これはラザロの場合。けれども聖書によるとわたしの場合はまだ書かれていないのですね。書かれていないのですけれども、聖書の中の人物が陥ったような絶望の淵をわたしたちも経験します。主は今も善き御業を成し続けていてくださる。それが見ないで信じる信仰の幸いではないでしょうか。聖書はそういう約束の書であって、信じて裏切られる事は絶対にありません。たとい、わたしが裏切っても、この方はどんな犠牲をはらっても私を闇から光へ引き上げてくださるのです。ヘブライ人への手紙の11章1節に「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」とあります。そしてアブラハムからずっと信仰の人々をあげています。ここでイエス様が語っておられる御言葉、為さっておられる御業を、見ないで信じるこの信仰の幸いの道を、もう一度、思いを新たにしてお一緒に歩んで行きたいと思えます。

◆お祈りいたします。憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたはご自身の知恵と力、そしてご自身の全てを投げ出しても、わたしたちを助け、救い上げてくださいます。そのことを信じて、その時を待って、これからの日々を歩ませてください。この祈りイエス様のみ名を通しみお前にお捧げいたします。アーメン。